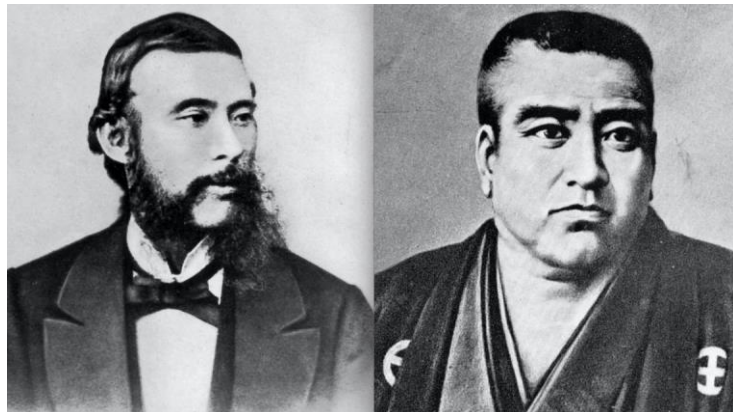


西郷隆盛の評価

首狩り族の中に居て「人殺しは悪いことだ」と言った男……それが西郷隆盛である。また「文明とは広く道が行われることを言う。国と国とは道徳と信義をもってつきあい、強い進んだ国は弱い遅れた国を攻め取るのではなく、慈愛を持って教え導いてやるべきだ」（遺訓より）……と、この様な個人の倫理を国家に押しつけるのは非常識だと、この点に於いて西郷は約百年の間、多くの識者から精神障害者扱いを受けてきた。しかし21世紀に近づき、欧米諸国はやっとその必要性に目覚めた。例えば1987年世界銀行総裁バーバー・コナブルは「成功した進んだ国は開発途上国を援助する義務がある」と道徳と信義の道が国家にも必要な事を表明している。

これに反し、日本は西郷の意を解せず、今も物質文明にのみ溺れ、世界に誇った優れた精神文明を忘れかけているようにも感じられる。日本は西郷の没後、彼の強く否定した欧米の帝国主義侵略の猿まねを善として後追いするが如く、日中事変・大東亜戦争へと引き込まれ、見事に破綻した。アメリカや欧米文明を鏡にして真似をした結果、逆に白人国家から危険視され、日本は潰される結果を招いた。西郷の予見は見事に当たったのだ。

明治の初め、西郷は百年の将来に理想を見つめて、政治の道を歩むよう政府に求めたのであったが、大久保の絶対官僚主義が国家の推進力となる、との思想によって、彼の要求は退けられた。西郷の挫折によって、日本はその後、羅針盤なきに等しい荒海の航海に乗り出してしまった。現在も真の政治家不在で再び沈没しつつあるように感じる。日本には西郷の如き羅針盤を持った人物こそ必要であろう。



大久保と西郷

西郷は危機に対し必要とされる資質を持つ政治家・軍事家として幾度か必要とされ、死生の場を潜り抜け、新日本建設の最高指揮者に押され乍ら、一転して反逆の人として斃（たお）れる。その間、維新回転の為、一心同体の如く協力した莫逆の友（ばくぎゃくのとも、心が通じ合っている間柄）「大久保利通」と志を違え、俱（とも）に天を戴（いただ）かぬ政敵となって死闘を演じた。

青年時代は、主君斉彬の片腕として、徳川慶喜（よしのぶ）を将軍継嗣（けいし）とする為に活躍したが、幕末には朝敵として討伐する官軍の総指揮官となって幕府を倒す。しかし晩年、慶喜が朝敵の汚名を除かれた西郷の墳墓（ふんぼ）の改葬の折、遠路はるばる鹿児島まで出向いて葬儀に参列している事実は、西郷の計り知れぬ深さ・大きさを示すものだろう。



徳川 慶喜

注) 将軍継嗣問題

13代将軍家定は将軍就任後、病状を悪化させて政務が満足に行えなかった。しかも子はなく、その後継者問題が急浮上した。これを憂慮した島津斉彬・松平慶永・徳川斉昭ら有力な大名は、大事に対応できる将軍を擁立すべきであると考えて斉昭の実子である一橋慶喜擁立に動き、老中阿部正弘もこれに加担した。これに対して保守的な譜代大名や大奥は、家定に血筋が近い従弟の紀伊藩主徳川慶福（後の徳川家茂）を擁立しようとした。前者を一橋派、後者を南紀派と呼んだ。

歴史家や学者等の識者で、西郷を語る人の手の間から掴んだはずの砂がこぼれ落ちる如く、西郷の姿が消えて行く。それは余りにも、西郷の実像と虚像の世

界が転々と移り行ったからだ。似た人物にリンカーンが浮かぶ。教育家の「新渡戸稲造」は旧制第一高等学校の生徒達から「日本にリンカーンのような人物は居るか？」と問われて、言下に「それは西郷である」と答えている。



新渡戸 稲造

リンカーンは一般的には奴隷制度廃止と民主主義の為に命を捧げて戦った「正義と人道の戦士」という事になっているが、彼は決して正義・人道の為に奴隷制度廃止など求めて戦ってなどいない。南北分裂国家を避ける為、また人身保護令など人民の重大な権利を停止し、国家権力を大統領に集中させた野心家、暴力圧殺した独裁者としても、未だに批判されているのだ。彼の実像も虚像も西郷の如く定まっていない。

西郷の場合、性格が合わず、時に叱責された大隈重信の一派や、久光からの評価は当然芳（かんばしい）ものではあるまい。しかし西郷評の多くが評する人物の尺度・器量によって異なるのは、原因が「西南戦争」による「西郷の矛盾性」から生じるものが多いと感じる。そう感じるのは、西郷の不評の多くは現代史家から多く発せられているからだ。明治の識者の西郷不評論に見られるのは、西郷に対するある種の負い目や恩義と後ろめたさを感じている事によって生じるものが垣間見える、故に許されるものもあろう。しかし現代史家達は西郷が醸（かも）しだす時代的声望や人気からは感受できず、同時に西郷の持つ人格的魅力や人間力を感得でき得ない状況での評価という大きな欠陥がある。即ち死体解剖からの所見を述べているような評価に等しく、西郷の生きた時代の人達目と耳と心から離れた机上の計数的批評になっている。

これに比べ、西郷と時代の風を共に感じ合い、共鳴もしたであろう「勝海舟」

や「福沢諭吉」「新渡戸稲造」「中江兆民」「山岡鉄舟」「高橋泥舟」「中岡慎太郎」「幸徳秋水」、「三宅雪嶺（みやけせつれい）」、「山路愛山」や「徳富蘇峰」の明治期代表的史家は西郷の人物像と業績を最も讃嘆敬慕して止まないようだ。

特筆したいのは日本に於ける偉大なるキリスト教徒の一人である「内村鑑三」は西郷の「敬天愛人」の思想を「まず神の国と神の義を求めよ」という聖書の「適切な注解」であると激賞している。「私の明治維新」＝（有馬藤太聞き書き）で有名な同氏の話によると、西郷は王政復古以後、日本は西洋諸国と交際することになるが、それには是非耶蘇教の研究が必要だと言って、西郷が漢訳聖書を貸してくれたと述べている。このことは「西郷の思想にはキリスト教の本質を見抜き、耶蘇の本質的思想が加味されていたこと」を示すことになる。



内村 鑑三

他に憲政の父・尾崎行雄・犬養毅・夏目漱石、哲学者の西田幾太郎など西郷とは接していないが、経世家としてよりも人間としての西郷を深く敬慕しその大らかさ、純粹さ、自制と寛容など比類がないと評している。

また西南戦争は、一面、時代に合わぬ士族の反抗であったろうが、多くの自由主義・民主主義者たちが西郷側に参加するという側面を持つものでもあった。例えば、大量参加した熊本協同隊は中心人物の宮崎八郎はじめ、ルソーの「民約論」を信奉する人々で民主的運営を行う士族や平民の混成部隊であった。また西郷に最後まで従った旧中津藩士、増田宋太郎（福沢諭吉の又従兄弟）隊長（60名）は最後の退軍行をするにあたり、西郷から中津への帰国命令がでたが、増田隊長は一人西郷と共に闘うため残ると主張した。隊員がその理由を問うと、急に涙を

流し、私は君たちと違い将として本營の西郷先生に接した。それ故にどうにもならぬ、「一日西郷に接すれば、一日愛生ず。三日接すれば、三日の愛生ず。親愛日に加わり、今は去るべくもあらず。ただ生死を共にせんのみ」と言って、生き残った隊員を中津に帰し一人残った。この隊も民権派を中心として「人民天賦の権利を回復すること」をスローガンに旗揚げして参加している。

西郷の命令を拒否し帰鹿した「村田新八」も増田と同じ理由で西郷と運命を共にした。「村田」はもし生き長らえれば、将来日本国首相に嘱望された逸材であった。国にとっては惜しい人物であった。福沢は増田の薩軍参加を、郷里中津藩の名誉とし、「灰吹きから竜が出た」と激賞したという。



村田 新八

終戦後の識者の中の西郷評は、「多くは想像であり、創造であろうし、また虚像もあり実像もあろう」、それでも良いのだ……と私は思うようになっている。一般的にいえば、西郷は日本史上「最高の理想主義者」であり、また「最大の現実主義者」であり、また「虚無の人」でもあった。しかしこの大西郷の上記の一つでも確実に知ることは、我々平凡な人間には難しい。大切なことは作家上田滋（しげる）氏の主張のように、「西郷の世界は一つの小宇宙の如く、深く広く大きい。故に西郷を観る時、ここを見据えないと大局を失う批評になる」との結論が一番正しいのではないだろうか。この認識が無いと結局「西郷ほどの大きな人物でなければ、彼を理解することはできぬ」という「海舟の言葉」だけが残ることになる！！

小生が一番望むのは、西郷の死体解剖された有識者の西郷観ではない。生き生きした日本を、また世界を大きな眼（まなこ）で睥睨（へいげい）する生きた西郷の姿から発せられる言葉であり、行動実学である。それは今となっては「南洲翁遺訓」から学ぶしかあるまい!!

西南戦争の敵将「山県有朋」の西郷評

若者達のために身を投げ捨て世の褒貶（ほうへん）をかえりみざるのみ

次に続く

皇紀2679年（平成31年）1月13日

志雲会代表 有馬正能

【主な西郷批判】

(大隈重信)

時代外れの「ウドの大木」。征韓論の遣韓使節の件も、全て行き詰まった。憐れな西郷が死に場所として望んだだけだ。

(後藤 靖)

「征韓論」から「西南戦争」への道程は、西郷が「滅び行く士族の棟梁として彼らの利益を守ることに汲々とし、文明国家を破壊して封建独裁国家を作ろうとした。

(萩原 延寿)

征韓論騒動とは西洋文明を嫌う保守派の西郷が、維新後の生活、社会への不満、不如意により「無事に安全を覚え内乱を乞い願う」心から死に場所を求めた西郷個人の問題で世を騒がせたに過ぎない。

(圭室 諦成＝たまむろたいじょう) …アンチ西郷像を作り上げた人物

西郷はきわめて排他的な郷覚意識と独善反抗的な政治理念の持主で謙虚な人格者どころか最も生臭い野心家であった。